

九つの大罪人がダンジョンにいるのは間違っているだろうか？

厨二病なりかけ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは作者がいつぺんにダンジョンに出会いを求めるのは間違つてゐるだろうかに入れたいキャラを入れた作品です。駄作にはなつていないと私は思います。設定もだいぶ凝つたので是非読んでみてください。

プロローグ

第一話

目

次

プロローグ

かつて、迷宮都市オラリオには三大最強派閥が存在した。

名はゼウスファミリア、ヘラファミリア、そしてエリザベスファミリアだ。

この三つのファミリアこそが、探索系ファミリア最高峰であった。ゼウスファミリアとヘラファミリアは大人数で形成されており、それぞれ100人以上の眷属が入る一方、エリザベスファミリアには9人しかいない。

しかし、この9人全員が高レベルであるという少数精銳のファミリアであった。

今この三つのファミリアは存在しない、なぜならゼウスファミリアとヘラファミリアは世界三大クエストに挑み、その内の二つのリヴィアニアサンとベヒーモスは討伐したが、最期の一つである黒龍討伐で全滅という結果に終わった。このことにより二つのファミリアは主戦力を失い、主神であるゼウスとヘラはオラリオから去った。エリザベスファミリアはこの出来事が起こる前に『闇派閥』の計画によつて主神を殺され、エリザベスファミリアは消滅した。この事件をきっかけに9人の眷属は後に大罪人と呼ばれるようになつた。

この9人の大罪人は九つの大罪と一括りでまとめられ、それぞれ『憤怒』『暴食』『色欲』『強欲』『憂鬱』『怠惰』『虚飾』『傲慢』『嫉妬』の大罪を犯した。

憤怒の罪を犯したのは元エリザベスファミリア団長であるメリオダス。

暴食の罪を犯したのは元エリザベスファミリア団員であるミラ。色欲の罪を犯したのは元エリザベスファミリア団員であるルカ。強欲の罪を犯したのは元エリザベスファミリア団員であるダン。憂鬱の罪を犯したのは元エリザベスファミリア団員であるミロク。怠惰の罪を犯したのは元エリザベスファミリア団員であるシクロ。虚飾の罪を犯したのは元エリザベスファミリア副団長であるリク。傲慢の罪を犯したのは元エリザベスファミリア団員であるギル。

嫉妬の罪を犯したのは元エリザベスファミリア団員であるシノ。

メリオダスは主神であるエリザベスを殺した者に復讐をし、計画に関わった者を神でも容赦なく殺し、神殺しの罪で捕まり『憤怒の罪』となつた。

ミラは元々よく食べる女性ではあつたが、それとは別で彼女の魔法は人の記憶、能力、欲等を食べるものであり、エリザベスという彼女にとつての抑止力がいなくなつたことと主神を失つたことによつて空いた心の穴を埋めるべく無差別に色々な者から記憶等を食べた結果『暴食の罪』となつた。

ルカは女たらしのところがあり、エリザベスによつてそれも比較的収まつっていたが彼女がいなくなつたことにより治らなくなつた上に、生み出された悲しみを打ち消すために多くの女性を誘惑し、己の欲望のはけ口にした。そんな時、ある女神と出会い改心したが、誘惑した女達の怒りを買い起訴され、『色欲の罪』となつた。

ダンは親友であるメリオダスの暴走を止めるために神を天界から引き戻せるという噂を聞き、エルフの森の中心の大樹下にある液体を手に入れそれを使つてエリザベスと引き戻しメリオダスの暴走を止めようとしたが、その液体の正体は不死になるものであり神を天界から引き戻すことができないことを知り、その液体を森に返そうとしたが、其の頃には遅く、エルフに襲撃を受け、死にかけになるとやけくそになりその液体を飲み干し不死となつた。さらに、その液体はエルフの森を存続させるのに必要不可欠のものであつたがそれを失つたことにより、森は枯れ、エルフは住処を失い、森を枯らした張本人であるダンはその罪により捕まり『強欲の罪』となつた。

大罪の原因になつたのが世間にも公表されているのはこの四人だけであり他の五人はなぜそのような罪になつたのかは公表されることはなかつた。どちらにせよ、この出来事により元エリザベスファミリアの全員が罪を背負つた。

罪を犯したものはもちろん牢獄に入れこまれ彼らも例外では無かつた。

八人はきちんと牢獄に入れられたが、唯一元エリザベスファミリア副団長であるリクだけは牢獄から逃れた。どんなものでも主神が死ねばステイタスは無くなるが、エリザベスは死ぬ直前に神の力を発動し、自分の眷属達にステイタスだけを残していくつた。そのため団員達は能力を発揮できたわけだが、ステイタスが残った時間もせいぜい一ヶ月程度であり、その後大人しくつかまつてしまつた。しかし、リクだけは違つた。エリザベスは死ぬ前日になんとなく死ぬことを予感しており、団員の中で一番しつかりしており、実力もオラリオ一であるリクにある祝福を与えた。それはステイタスの自己更新権である。これにより神がいなくともステイタスをずっと更新することができるようになつた。この祝福に彼が気付いたのはエリザベスが死んだ後であった。この自己更新権により、ステイタスを失うこともなく、レベル8である彼を捕まえられる者もいなかつたためリクは逃げることに成功した。捕まつた八人も事情がわかるとダン以外の皆はすぐに解放された。ダンの犯した罪は償わなければいけないものであつたため牢獄に長いこと入れられることになつた。しかし、そんな彼にも善行の数々があつたため一年ほどで解放されることとなつた。

しかし、彼らの犯した罪は解放された後も消えず、大罪人として過ぎすことになつた。メリオダスはヘスティアファミリアに改宗し、ミラ、ミロク、シクロ、シノはロキファミリアに、ルカ、ギル、ダンはフレイヤファミリアに改宗した。リクだけは未だ誰にも発見されておらず、彼の愛武器であるかつて彼と鍛治神のヘファイトスの合同作業によつてできたオラリオで一番といえる双剣は持ち出されていたためダンジョンにいると推察されているが、ギルドは一年間以上ダンジョンにいるリクはもう死んでいると判決した。

真相は未だ誰にも分からぬ。ある者の噂ではもう地上に出ているや、まだダンジョンで生きている、もしくはとつくな死んでいるだのいろんな賛否両論はあるが、長い年月が経つた今ではその噂すら風化している。

この物語は原作主人公であるベル・クラネルが9人の大罪人に感化されながらも英雄を目指す物語である。

第一話

俺はまた、戻つてくる。

私の大切なにいにはそう約束して、私達から去つていった。

なんでまだ戻つてこないのにいに？

こんなに長い間待つてゐるのに。

私を置いていかないでにいに。

置いてかないで！

私の意識が冷めていく。

瞳に一粒の涙を浮かべて。

「シ・ロ・・く・・・・さい」

「シクロ・・く起き・さい」

「シクロ早く起きなさい！」

ロキファミリアの団員、シノはシクロを叩き起^マこした。

「うーん、あと五分・・・」

「あと五分つて言つて、本当に五分で起きたことなんてないでしようがー！」

「うつ、わかつた。起きる」

シクロはノソノソとナメクジみたいな遅さでやつと布団から出た。
「布団の強さは異常・・誰かが起こしてくれなかつたらずつと寝させられてしまう」

「だからシクロは怠惰だつて言われちゃうんだから、もつとシャキつと起きなさい」

「・・無理・・・」

「そんな感じで否定しないの。というか、とつとと着替えなさい」

「ん」

「じゃあ、私は先に食堂に向かうわよ。ナシロも早くしなさい。ロキはみんなが集まるのを待っているんだから」

そう言つて、部屋の扉から出て行つた。

シクロは服を着替えながら夢のことを思い出していた。

にいにと最後に会つた時と同じだつた。

あの決心したような顔も、周りの景色も一緒だつた。

シクロはある事件から五年経つた今でも、帰つてこない兄に対しても言葉を零した。

「にいに、どこへ行つたの？」

と涙を少し浮かべて、涙声で、小さな声を零した。

ナシロには到底兄であるリクが死んだとは思えなかつた。

強さという点もあるが、嘗ての主神に何かしら特別な祝福を貰つているということも知つていたからだ。そして、これ以上に兄が今まで約束を破つたことがなかつたからだ。

「お願ひ、早く帰つてきてよ。にいに」

「盗み聞きとは趣味が悪いなシノ」

「そういうあんたこそ耳澄ませて聞いていたでしようニミラ」

「ふつ、まあ違ひない。彼女が心配なのは私も一緒ということだ」

「本当にあなた達は過保護ですね」

「ミロク」

「あなたの方こそ過保護でしょに」

ミロクに指摘されたシノはため息をつきながら返した。

「全くだ。まああのシスコンリクのことだ、すぐに帰つてくるだろう」

「まあ、そう言われると納得ですね。あの男の生命力はゴキブリ並：いやカメムシ並ですからね。死んでいるという可能性も万に一つもないでしょう」

「それは違ひないわね。あのシクロの前では頑張つてかつこつけるナルシストが、妹のために帰つてこないわけがないわね」

とミラ、ミロク、シノの順にこの場にいない嘗ての副団長を貶して

いた。

「ひつ」

その時の三人をたまたま見ていたラウルは三人の満面の笑みを見て、美しいはずなのに、とてつもない恐怖を抱いたという。三人の様子を見ていた他の団員達も生きた心地がしなかつたという。

この後、ナシロは服を着終わり、食堂へと向かつた。

——食堂

「シク～ロ～ちゃん」

と叫びながら主神であるロキはシクロを見るや、すぐにシクロに向かつてダイブした。

シクロは片手を出すと、彼女のスキルを発動した。

『一方通行』

彼女が持つ唯一のレアスキル。シクロの驚異的な頭脳により、ほとんど全ての事象を演算することができ、ベクトルを操ることができることのスキルはシクロのためにあると言つても過言では無いものだ。演算ができなければこのスキルは真価を發揮しない。演算のスピードも速いシクロはロキがダイブして、抱きついてくる少しの間に軽く演算を終わらせ、周りの風のベクトルを操り、主神であるロキを吹っ飛ばした。

「今・・私不機嫌、もう今日はダイブしてこないで。演算するのだつて疲れるから」

ロキが向こうの壁に衝突する手前、小さな人がロキを救つた。

「全く、これでも一応神なんだから手加減したらどうだい？」

ロキファミリア団長であるフイン・ディミナその人であった。

「これでもつてなんや、これでもつて！」

「そんな態度だからそんなことを言われるのだ」

「全くじやわい。主神様はいつも変わらんの」

と順にロキファミリア副団長リヴェリア・リヨス・アールヴ、最古参であり幹部の一人であるガレス。

「まあ、これで全員揃うたし、食事といくで～！」

「「「「「「いただきます」」」」」

食事が終わった後、シクロはダンジョンに潜ると言つて出て行つてしまつた。

シクロは毎日、起きてはダンジョンに潜つていた。兄を探す、ただそれだけのために。これまでシクロは体が怠くとも、ダンジョンに潜り、兄、リクの情報を集めた。時には『深層』まで潜ることもあつた。もはや彼女の意識は兄にしか向いておらず、自分のファミリアの仲間以外と話すことといえば、兄の情報を聞き出す時だけになつていた。彼女は言つてしまえば病んでいるのだろう。

そして、シクロはまたダンジョンへと潜る。

——一週間後

「わあ～、ここが迷宮都市オラリオか～。おじいちゃん、僕は英雄になるよ。そして、素晴らしい出会いをするんだ。このオラリオで！」
と神の塔『バベル』の前のデカイ一本道の上でベル・クラネルはそう小さく叫んだ。

「につしつし、面白いことを言う奴がいたもんだ。にしても、あいつとはもう一回会う気がするな」

これは予感であった。そして、この予感は的中することになる。